第12回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（優秀賞）】

藍染の手ぬぐい

長谷川 潤・滋賀県守山市

その日は鏡開き、道場の神棚に飾られた鏡もちを割って、まるで風呂釜のような大きな鍋で前日から煮込んだぜんざいに放り込む。小さな町の警察署に勤務していた私は寒稽古を終え配膳の準備をする。甘いものが少し苦手な私だが、このぜんざいは別格だ。白い湯気が立ち上がるのはこの鍋からだけではない。柔道、剣道の猛者（もさ）達の大きな背中からも湯気が出ている。署長から、柔道をする者には、しっかり汗を吸い取る鮮やかなオレンジ色のスポーツタオル、剣道をする者には藍染めの手ぬぐいが激励品として贈られた。

手ぬぐいは、頭に巻き付けてから防具の面を付ける。汗が顔に落ちるのを防ぐとともに竹刀で打たれた時の衝撃を軽減するためだ。鮮やかな藍に「忍（しのぶ）」と筆文字で白く染め抜かれている。「いただきます」と手を合わせた時…万引きしたとして五人の子どもが署に連れてこられた。同じクラスの小学五年生。所持品を見ると四人は、それぞれ五千円以上持っていたが、財布も現金も持っていなかったその子だけは万引きをしていなかった。

知らせを受けすぐに四人の子の親達が署に駆けつけた。身なりはきれいだが、警察署に呼ばれたことを不満そうな親もいた。警察の説明もうわの空、まるで示し合わせたかのように、こもごも「あの子とは遊ぶなと言ったでしょう！」「あの子が最初に取ったんだろ！」等と言いながら帰って行った。

四時間が過ぎ時計の針が午後十時を指そうとした時、コンコンとノックの音がしてドアが静かに開いた。小さな声で「失礼します」と言いながら背を丸めうつむきかげんに入ってきた女性は左手にヘルメット、右手には使い込んだ軍手が握られていた。足もとは泥で汚れた長ぐつ、輪ゴムで止められた黒い髪にも跳ねた土がついていた。濡れた作業着を見て、いつしか外は雨になっていることを知った。

一人ぽつんと椅子に座り母を待っていたその子に「おまえがいたのに、なんで止めなかったんや！」と絞り出すような声で言った。その子が、何か言おうとした時、管内のことは誰よりも知っている定年を控えた皆がおやじさんと呼ぶ駐在所の主任が濡れた雨ガッパを着たまま少年係の部屋に入って来た。

重く張り詰めた空気を敏感に感じ取ったおやじさんは、私に別室に来るよう目で合図を

した。これまでのいきさつを説明するとおやじさんは雨ガッパを脱ぎながら、その母子について語り始めた。

父親は三年前になくなり、今は小さなアパートに母子二人で住んでいる。母親は土木作業の他にビルの清掃など数カ所を掛け持ちして働いている。例の四人の同級生とよく一緒にいるが、ピカピカのスポーツ自転車に乗る四人の後ろを低学年の子が乗るような小さくて古い自転車を一生懸命こいでいる。夏休みのある日の午後、公園横の自販機で買ったサイダーを飲んでいた四人、その内一人がその子に飲みかけのびんを差し向けたが、笑顔で断り、公園の水道水を飲んでいた。桜の季節には駐在所の前を流れる川の土手に腰掛けた母子が楽しそうに大きなおにぎりをほおばっていた…さすがおやじさん、本当に何でも知っている。もとに戻り、母親にその子は万引きの現場にはいたが万引きをしていないこと、同級生達が万引きすることは知らなかったことを説明した。私は、その子の肩を握り「もう何も言わなくていいよ。いつもよく頑張っているんだね」と語りかけると、その子は一瞬、くちびるを動かそうとしたが、ぐっと噛み締めた。そして、一粒の涙がポロッと頬をつたった。

署長が入って来た。私の肩をポンとたたき「食べそびれてたな」と微笑んだ。見るとあのおやじさんがお盆に湯気の立ち上がるぜんざいを三つ持ってきた。母親ははじめ遠慮したが、三人で食べた。

あれから十年が過ぎ五つの署を転々とした。今日は年に一度の柔道・剣道大会。すべての警察署、本部各課の選手が一同に集い、日ごろ鍛えた技を競う。私はもう部下の応援役だ。会場となった警察学校の道場に入って間もなく、見上げるような大きな若者が駆け寄って来た。「きっと会えると思っていました！」頭には使い込まれたかなり色褪せてはいるが藍染の手ぬぐいだ。「忍」の白い筆文字がはっきりと読み取れる。あの日、母子が署を出る時、雨は雪となっていた。少年はマフラーを持っていなかった。署長からいただいたばかりの真新しい藍染の手ぬぐいを少年の首に巻いてあげた。警察官となったことを誰よりも喜んでくれた母親と今も生活しているとのことだ。込み上げるものがあった。思わず彼の右手をとり両手でしっかりと握りしめた。彼もまた左手を重ねもっと力強く握り返してくれた。

私の心の中にある藍染の手ぬぐいは今も鮮やかで色褪せていなかった。